

三河アララギ

平成二十六年

十二月号

第六十一卷 第十二号



ニューヨーク日記(98) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

October 24, 2014 : El Palau de la Música Catalana

Blue Shoe Diaries



素敵! バルセロナでの休日〜! Palau de la Música Catalanaを見学。綺麗だよね〜! 今でもコンサート会場として使われてるの。バルセロナの街はなんか心地いい。ブエノスアイレスに似ている感じがするからかなあ? それとも食べ物が美味しいから? クラシックからモダンな料理テクニック何方も良いね! 色んなタパスバーをハシゴしたり、歩きながらチュロス食べたり、昔からのレストランでイカスミのごはん(アロスネグロ)食べたり。やっぱり食べ物に惹かれてるみた〜! 幸せ見つけた!

Fantastic! Vacation in Barcelona. We went to visit Palau de la Música Catalana among many other places. Isn't it absolutely gorgeous? I feel like it teaches you the meaning of words like: incredible, stunning, delightful, exquisite, don't you think? Barcelona is such a wonderful city that has something that feels very familiar. Maybe because it reminds us of Buenos Aires when we were kids? Or for me, maybe I'm just drawn to the food :D Such yumminess in this city! From the classics to the modern cooking techniques. It's all so good! From tapas bar hopping, to eating freshly made churros from a 100 year old recipe on the street, to eating arroz negro at a tradition filled restaurant. Happiness is found here.

目次

第六十一卷第十二号(通卷七三二号)

表紙 聖母	ニューヨーク日記(98)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	歌集「スモン」
秋の夜	外つ国
持統帝	コスモス
台風	露草の花
父を母を	レモワ
今の今	謙虚と気高さ
文学散歩	月下美人
秋神奈月に	鋭し
晴れやかに	片言日本語
黄素馨	お友達
新藁	合歓
木枯一号	引馬野
現代学生百人一首	『ことよせ』
私の一首	

今泉 由利 (1)	Blue Shoe (2)	大須賀寿恵 (4)	岡本八千代 (5)	今泉 由利 (6)	弓谷 久子 (7)	青木 玉枝 (8)	内藤 志げ (9)	林 伊佐子 (10)	安藤 和代 (11)	鈴木 孝雄 (12)	伊藤 忠男 (13)	清澤 範子 (14)	半田うめ子 (15)	富岡 和子 (16)	近藤 映子 (17)	森岡 陽子 (18)	足立 晴代 (19)	杉浦恵美子 (20)	平松 裕子 (21)	小野可南子 (22)	山口千恵子 (23)	夏目 勝弘 (24)	阿部 淑子 (25)	白井 信昭 (26)	東洋大学 (27)	一郎はとぶ (28)	杉浦恵美子 (30)
-----------	---------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	-----------	------------	------------

『俳句』

かさね吟行会	『酔いの徒然』(32)	ある自然科学者の手記(31)	絹の話(49)	物理学者と詩歌の世界(59)	短歌に詠まれた茂吉	楽しい時間(25)	永平寺(1)	「氷魚」のことから(167)	ことのはスケッチ(432)	歴代天皇御製歌(三十一)	編集室だより(二〇一四年十月)	和菓子街道(98)	お知らせ・編集三河便り三河アララギ規定	貫名海屋資料館	平松 温子													
内藤 志げ (30)	夏目 勝弘 (31)	林 伊佐子 (31)	松本 周二 (32)	山元 正規 (32)	川井 善山 (32)	重野 清秀 (33)	田中 陽子 (33)	森岡 皓一 (33)	柳田 文彦 (34)	米田 勝信 (34)	和田 公女 (35)	植村 清司 (35)	小池 清秀 (35)	小柳千美子 (36)	田中 清秀 (36)	丸山 醉宵子 (38)	大橋 望彦 (40)	今泉 雅勝 (42)	今泉 一石 (44)	鮫島 満 (46)	山本紀久雄 (48)	夏目 勝弘 (50)	岡本八千代 (51)	今泉 由利 (52)	貫名海屋資料館 (53)	平松 温子 (54)	和菓子街道 (55)	お知らせ・編集三河便り三河アララギ規定 (56)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

苦しみをまたたのしみを言ひ合ひてこの秋の日の昏れゆく速し

P 1 4 0

ひとつばたごなんぢやもんぢやの椎木の勢きはははざるまま冬に入りたり

P 1 4 5

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

辞めるまで辞めるなどとはいふべからず三耗原紙の粹取りをする

偶然に偶然がまた重なりゆきわがゐる部屋にコホロギの鳴く

絶え間なく腹痛するが常にして痛み止めの薬しまひなくしぬ

秋の夜

蒲郡 岡本八千代

秋の夜の一夜一夜がすぎてゆく何をかおもひまた恕ゆるしつつ

為人ひととなりに少しくユーモアもちたしと思ひつつ秋の夜の更けつつ

などか今宵ロマンチックになりてくる老ゆらくのわがしづ心かも

台風も野分のほどに草吹きて去りてゆきたり今朝の静かさ

秋あらしいづくにか去りうす曇りけふは曾孫の七五三詣り

東京のゼロ歳と三歳らが二階にゐる明るき電気の光は庭まで

久しぶりに二階の電気の明かりさす秋草あきくさ千々ちぢのこの夜の庭

曾孫のいたづら責めむとわれはつひ「あの子変な子ぼたもち顔で」つと

またわれは「黄粉きなこつけたらうまかろ」とかつての童話うたひし夜かな

曾孫のしゃぶり残りの千歳飴ふぶ含みつつ開く茂吉歌論集を

外つ国

東京 今泉 由利

見ることも感ずることも無きままに素粒子といふ存在のある

自らの居場所を探し求めこしこの頃決めるしばらくここに

刻々と変りてゆける時の間を何をなすべき何を思はむ

ロンドンに向けて飛びゆくこのときはシャブリー一本わがものにして

降りたちしロンドン空港雑踏にアムステルダムより来む人はまだ

百年をタイムスリップせしごとしバルセロナの町並をゆく

直角を感ずることの無きままにふはふはとあるサグラダ・ファミリア

デコレーション・ケーキのやふな町にゐていとほしくありおいしくもあり

電球の赤い色する町々を見降ろしてゐるスペインの空

守ること残しゆくこと存在を知らしむること当然として

持統帝

豊川 弓谷 久子

穏やかに晴れたる今日は御津川に添ひて歩まむ心ゆくまで

持統帝使者が都へと越えしとふ御堂山蒼し秋空高し

やつぎばやの台風にうんざりと日記に書きぬ尚吹き募る雨風の音

台風の一夜明けたり庭隅に音もかほそし鉦たたきの声

我一人のおしゃべりとなる相づちを打つ事も無き姉の枕辺

八十路まで団体引き連れあの山に登りし翁よ噴煙高し

冬物の座蒲団干したり秋の日の光あまねき縁台の上

先生のもとへと通ひし日も杳かビナンカズラと訓え給ひき

戴きし両切鋏の切れ味を楽しみ草刈る音高く刈る

霜月を待たず石露咲き出しぬ我が庭隅を黄に彩どり

コスモス

新城 青木玉枝

二百十日二十日も事なくすぎゆきて紅葉の映る川の流れに

暫らくの静寂と思ひ山里に二年の歲月何時の間にすぐ

秋日和コスモス畑へ見物に荘の車の窓際によりて

車窓より紅葉の樹々を山並を秋の山里道は一すじ

コスモスの咲きつづく花畑介護師の手押しにゆられつ青空の下

都会では吸^すへない空気このうまさ大空むけて腹一杯に

世の中は変れば変わるものなりや戦前戦后生きしわが身は

五平餅一本食べる嬉しさよ花とだんごにかこまれて

手をかざし刈田のつゞく山道を心ゆく迄今日のひと日は

日の暮れは何故か侘しき独居の部屋より見上ぐ一番星を

台風

豊川 内藤 志げ

台風はわが地に向うの予報にて夫は次々葱を採り込む

休みつつ愚痴を言いつつ揃へある葱を束ぬるわれの仕事と

竹の穂の深き靡きを窓越しに台風過ぐるは夜中となるや

時季はずれの玉蜀黍の葉が揃う実るかと云う分らぬと答う

台風の過したる朝の家敷畑玉蜀黍は入り乱れ伏す

入り乱れ倒れ伏したる玉蜀黍起すべからず起きるを待つべし

川端の採りやすき所と見定めし野ぶどうの実の跡形もなし

先を行き花があるよと呼ぶ声にロープを伝い石径を下る

用水の池の傾の座り葉に黄に莖立つは花わらびと

自転車にて転びし事は内に秘めお風呂上りに傷バンを貼る

露草の花

岡崎 林 伊 佐 子

逝く夏のひと日のみ咲き咲き果てる露草の花が畑に彩どる

露草も朝顔もおなじ藍に咲く今日をまたたく短命の花

薬剤を撒かぬ畑に蝶々も花虻も来てしばらくを飛ぶ

薬剤を撒かずに野菜を育てゆくわれの理想は亡き父母に似る

今の世に薬剤まかねば虫もつき鳥も啄む自然栽培は

杉の間に見え隠れする電線が過疎となりたる旧家を点す

分ちあふ村人は町に離村して廃屋ならぶ絶滅の危機

過疎村のいっぽん道の行き止まり週末くつろぐ旧家のこるれる

収入に拘ることてなく老いふたり持山まもる山林労働

妻としてまた母として祖母なれば成すこと多く生き甲斐となる

父を母を

豊川 安藤和代

柿の実のややに色付くその上に祭り花火の輝きを見る

細き灯に小さき虫の集まれば小さき蜘蛛が巣を張りてゆく

自転車のベル軽やかに風きりてコスモスの道孫は帰り来

夕暮れて実りの稲穂輝けばいよいよ秋は深まりてゆく

半年に三度の手術をする夫にかくる言葉をさがすも悲し

医師からの説明を聞く吾が頭真白しろで唯ただ黙しぬ

草でさえ生くる力の漲るに夫よ頑張れ負けてはならぬ

とは言うも吾の心も折れおれて奥津城に父を母を呼びをり

退院を願いて夫と夕焼けのそのやさしさにつつまれてをり

倒れても又起き上るコスモスの可憐な強きに教えられいつ

LED

沼津 鈴木孝雄

上弦の月輝きて西の空漁火の海とひかりの共演

台風の被害極力抑えんとピーマン・ナスの収穫急ぐ

台風十八号何事も無く通過せり沼津をまさに避けるがごとく

台風去りトンボの日和戻りしも砲弾の響き今日も続く

ブロッコリーの葉を裏返し青虫を一匹一匹摘み捕殺す

ウジ虫が湧いた堆肥を天日干しどこで見てたかアカハラ来る

マンシヨンの管理セミナーにて学ぶ高齢老朽他人事でなし

だめ詰まり大きく石を取られけり何時になったらポカが直らん

この年はエアコン・洗濯機・電気釜次から次と動かなくなる

視力落ちしLEDに交換す読書意欲がよみがえりけり

今の今

大阪 伊藤忠男

飛鳥路に吹く風今も愛し目で稲穂見下ろす甘櫛の丘

山の水集めて流し噴水を愛でて歌詠む和やかな宮

裾押さえ水汲む采女幻か昔懐かし板葺の宮

稲穂揺れコスモスなびく古代道心現らずや幻の宮

時に生き時乗り越えて時めぐる俗世無縁な明日を夢見て

いつもとて変らぬ道を駅急ぐ時に追われてはや古稀を過ぎ

花火見え遅れ音する時のずれ今の今とてそれも幻

時過ぎる速さ変らぬはずなのにゆっくり動く田舎の時計

行き帰り同じ道とて帰り道近くなりしは何の仕業か

床に就き淡いライトで本を読むこの日唯一の安らぎの時

謙虚と気高さ

春日井 清澤 範子

吾が歩む道辺の稲田は刈り取られ脱穀すみて広さ増したり

夫も吾も足腰病みて今年は菜園休み淋しかりけり

木犀は匂ひ放てり玄関の扉開ければ吾が身つつまる

庭に咲く金木犀の花言葉謙虚と気高さ吾は好きなり

山茶花と替ゑて植ゑたる櫟いちょうの垣根赤き小粒の甘き実の付く

信号のボタン押して夫と来る神社今日は御幣ごへいが曲りてをりぬ

黄色こがねに波打つ景色もうすぐと空を揚げば赤とんぼ飛ぶ

堤防の土手のもろ草刈り取られ添ひて歩めば草の匂ひする

廊下にてカーテン越しに庭を見る椿の花芽日々に増しゆく

リハビリにて川の流れる道沿いに諸草の中萩の花見ゆ

文学散歩

新城 半田うめ子

手のひらを見てもらひたり事故のあり転ばぬ用心注意ありたり

庭隅のすみれの花の下に居り雨かへる時々とびはねるなり

わずかなれど今日も頂く孫よりの汁粉楽しく味のよくして

生おい茂る杉の枝の折れたるは道端にて多くころがり

川路にてやさしかりしの天野あまの様文学散歩思出のあり

尾を切られへビの居るなり道の辺につかみ来たりて畑に入れるる

山茶花の花の散り行く下にして花咲きをりぬオシロイの花

西川を歩きつつ行く西へ西へ向ひつつ居り小魚そよぐ

東の杉林の中今日も又からすのさわぐ何みつけしか

月下美人

東京 富岡 和子

秋はしり名残り朝顔青冴えて故郷さとに戻りし友の置き種子

オレンジの揚羽大きく初見えの友の送りし朝顔覆ふ

今宵また月下美人の芳香かをり受くねむりを惜しむ新月の夜

十八号構内あまた銀杏を匂ふ臭うと友とかけ足

名残り月陽にのこし置く十九号青空のもとシヤツ干し終える

寒露の夜皆既月食仰ぎ見る欠けゆく速さカメラマンの手

紅葉もみじます鶏頭の葉のかがやけり尾長と鳥の被害を許して余る

秋日和一日バスの庭めぐりバラとダリヤと結婚式も

予想外冷たさともに秋の雨日頃の管理反省しきり

髪カットそのサイクルは同じはず廻りくる日に追われるように

秋神奈月に

名古屋 近藤 映子

晴天続くこの秋に私の手足は痛み居り湿布を取換え

住宅の玄関先の金木犀今年もこんもり咲きて香りぬ

金木犀玄関先に香り居り我古里の庭思い出す

神奈月の澄みたる空は見てる間に月欠けてゆく一人見てる

神奈月十四日になり大型の十九号台風は日本列島に

秋小雨のしとしと降る日神奈月二十一日の過ぎ行く時よ

「天徳院功道淳心居士」と朝夕に線香上げ吾の安らぎ

神奈月めつきり涼しい朝なれど吾の体力回復の遅し

十月の朝八時四十五分の検診は杖と娘を頼りに早起す

検診日帰路に花屋を見つけたりミニシクラメン紅白鉢を

鋭し

東京 森岡陽子

稲穂刈り雀といなごと蛙等と稲穂の間に飛び出し脅かす

祭り笛祭り太鼓叩くのは老舗の店の三代目なり

のんびりと猫たむろする階段で夕日背に受け友と談笑

あちこちの馴染なき町散歩する思わぬ所で驚きの発見

品川の石榴坂下り見る映画石榴坂の仇討話し

愛猫に囲まれ暮した彫刻家瞳やさしき作品鋭し

絶滅の哺乳類達大集合化石並びて姿復活

雨音のビージーエムについ昼寝犬も一緒に並んで昼寝

宮参り府中の杜の神社では祝詞と合唱赤子の泣き声

秋夕焼錦絵が如美しい波頭輝き海鳥も飛ぶ

晴れやかに

東京 足立晴代

屋根の端はに松まつケ枝え越えしの月丸まるし重なる影の色濃くして

訪れし秋浅きひに甥姪おいめいと最後しんがりつとめ吾墓詣で

赤松の老いたる枝に尾長なる鳥囀さえづりて姦かしましく

定まらぬ変りゆく空雲流れ降りしきる雨雨音高し

矢ことの如ごとく激はげしき雨の降る道は低ひくきに流れ川となりゆく

見事なる新種の洋梨贈られしあまりの美味したつづみやに舌鼓したつづみや止まず

晴れやかに雲なき空碧くあり心さわやか佳き日なりけり

光と音交まじわる宴うたげに招かれし戸惑とまどう吾は昔人なり

過ぎし日を忍びて語かたる吾わが夫つまの想い出あらた甥姪と共に

新世代若き人々様々な思考しこうに驚く吾れの日々なり

片言日本語

蒲郡 杉浦恵美子

真夜中のKL空港降り立ちぬさあひとりなり何をするにも

ホテル行きバスは未だ来ぬ午前零時クアランプル空港の外

一時間待ちて漸くバスが来た灯ひとつない曠野を走る

ああこれよねつとり絡む空気感クアランプルは熱帯にあり

着付練習重ねて来たがさあ本番ホテルのベッドに着物広げる

着物着て背筋伸ばしてフェイちゃんの母の迎へをロビーにて待つ

二年ぶりチャイナドレスのフェイちゃんは花嫁仕度の仕上げの最中

仕度部屋は英語中国語フランス語の飛び交う中に片言日本語

壇上のフェイちゃん訥々日本語のお礼の挨拶して呉れてゐる

宴果てて出づればスコール轟けるクアランプル深夜の街に

黄素馨

豊川 平松 裕子

静かなる呼吸を聞きて安堵する大き君の手も変わりてをらず
びくびくと瞼の動く気配あり我の呼びかけに応へてゐるか
呼びかけに応へむとするか唇を動かす孝子さんに涙出できぬ
ま白なる髪をなでつつ呼びかくる我にはつかに笑みたる眼
庭の木々草花などのひとつさへ倒るることなく野分き過ぎたり
常のごと新聞受けに新聞あり暴風圏のさ中なる朝
きのふ二つ今朝は三つときじくの黄素馨の花門に散りをり
吾が目には見えざる蜘蛛の糸を伝ふ女郎蜘蛛に雨降りはじめ
国坂の田に立つ君に思ひ馳す我の知らざる若き日のたあちゃん
この世より消えゆく別れとは思はざり我の記憶の中に生き続く

お友達

豊川 小野可南子

一年生の少女の会話弾みつつ金木犀の香りの中を

今日の日は素直に従きくる男児なりランドセルに触れつつゆきぬ

十五夜の明けたる今朝の西の空くつきり円かに白きつきかげ

庭木々の徒長の枝を剪る我につかず放れず二つの黄蝶

ニユーヨークよりメールの返信届きたり雨はあがりて真澄める空よ

ハンモックを揺らし揺らるる幼な日は私の記憶に確かなひとつ

生え揃ふ蒨草の青みどり佐奈川よりの霧もはれたり

やはらかきこのホーレン草を幼な児の離乳食にどうぞどうぞ

知り合いになりたるばかりのこの母子我の最も若き友達

我を見て手を差し出し笑顔見すお友達なりこの赤チャンも

新 藁

豊川 山口千恵子

夕暮れの稲田の中より飛び立てる放れ白鷺白美しき

両足を揃えて白鷺飛びてゆく汚れ少しもなき真白に

皆既月食始まる頃と外に出るほんやり見ゆる雲のべールごし

倒れたるフジバカマを束ねたりわが庭に来ずアサギマダラは

秋小豆の今年とれたるをザルに干す色赤々と秋の日に照る

ザルに干す小豆の赤を手にくくふ虫喰ひ豆を選び出さむ

たちまちに刈り取り済める稲の原あたりに漂ふ新藁の香り

大型のコンバイン動きたちまちにわが田の稲は粃になりたり

夕暮れの庭にダチュラの白き花白々咲けり香り放てり

待ちてゐし合格われに知らせくる春より英語教師になれる

合 歡

豊川 夏目勝弘

道端に尽くすも絶えざるネムの木を仕方なしに育てきにけり

ネムの木は家具材になるとあり切られしままに腐りゆく見ゆ

道路には枝を伸ばさぬ仕立にて庭道覆ふ木に育ちたり

この夏は細さい淡き小さき紅育てこし日月何年なりや

閉じし葉開きし葉こもごもに暑さをふふむ夕風にゆるる

まだつづく梅雨の晴れ間の暑き日日ネムの木眠れば我も寝にゆく

細細のうす紅色のネムの花夜に虫よぶ花にしあらむ

いまだいま眠れるネムの木下ゆき手に重たき朝刊を抜く

梅雨の雨に繁る葉群の重重し凌ぎて凜とネムの紅

いと暑き梅雨の晴れ間の真昼中ネムはことごと葉を閉じにけり

木枯一号

横浜 阿部 淑子

木枯の一号吹いたと耳にせば冬物出してあわて重ね着

秋深く紅葉装もみじよそおう落葉等は身軽に舞いて坂道下る

秋の日の釣落つるべおとしに小雀は木々に集いてさわがしく鳴く

ベビーカーに寄り添い歩く幼児おさなごに邪険な母の振るまい哀れ

LEDバチカン宮殿に輝きて芸術の粋いよよ高まる

引馬野

豊川 白井 信昭

古の引馬野の名残求めつつ亡き師の碑巡らむこの秋日和

今の世に詞は語る万葉の「二見の道」の標しるべであると

檜の杜萩原の宮に青岩の大き歌碑は威風堂々

見晴るかす空と海の果てしなし分かつ所的一条の線

現代学生百人一首 東洋大学

手にスマホ耳にイヤホン目は下に残る五感は味覚嗅覚

田園調布雙葉中学校 二年 中馬里菜

ラインして既読つかない3日間私の不安は高まるばかり

聖心女子学院中等科 二年 天野真幸

朝霧をまといたたずむ夏の富士そのまま空にとけこみそうで

学習院女子高等科 二年 金岡由里子

さあ行こう海月のようにフワフワと無計画こそ自由の証

専修大学附属高等学校 三年 坂巻翔伍

虹を見たそんなささいな出来事が前向き生きるきっかけになる

中央大学高等学校 一年 小原杏奈

会話せず友達家族ラインだけ今にもしもし死語になるかも

中央大学高等学校 一年 山口大介

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

枕辺の窓を細目に開けてみる虫すだく声部屋に満ち満ち
一日を家うちにて過ぐす日はきれぎれの時さへつづけ読書す

山崎 俊子

厨べに蟋蟀の鳴くこの夕べ夫の逝きしにし去年の日思ふ
水琴の妙なる音を聴きにしは白鳥町のアキさんの庭

三田美奈子

そこここにイヌサフランの妖し花ひそかに咲けり秋来たるらし
歳重ね描ける夢も小さくなり盆に集ひしわれらうからら

水野 絹子

いつまでも眠られずにて床の中刻々と時間ときは過ぎてゆくかな
青春の寝食共にせし友より集ひのさそひの電話のうれし

牧原 規恵

いつしかに仄かに風のほふなり思はず吸ひこむ今朝の大気を
我と孫海に遊べり西浦の桜貝拾ふその淡き桃色

稲吉 友江

「夏の中にこっそり秋が来てゐる」か我が目の前にはやアキアカネは
セントレアに一時帰国の息子らと並びゐるかな動く歩道に

鈴木美耶子

学院の友らと語らふこのひととき我の隣に豊川の女^{ひと}
あかね雲夕べの空に広ごれり散歩する我の熱き心よ

吉見幸子

生徒らも我らもみんなテントの中運動会は今はじまらむとす

いつのまにか運動会の始まりてわからぬリズムのストレッチ体操

牧原正枝

声あげる朝錬の生徒らにすれ違ふ呼びかけたくなるこのさわやかさ
彼岸花今年も咲きて畦道にはなやかなる色燃ゆるがごとし

岩瀬信子

夜の空にオレンジ色の月光る今宵あたかも十六夜の月
折り紙を折る男孫^{まご}の指しなやかに折鶴八羽が連なりてをり

石田文子

入院を旅行と認知の母なれば安らか願ふ転所の今宵

涼やかな目にて初めて月を見る孫に光りぬ中秋の名月

森厚子

私の一首

病室に我が夫が待つ我を待つ独り待つてゐひたすら我を

杉浦恵美子

『三河アララギ』平成二十三年六月号

私が三河アララギの門を叩いたのは、二十年前、母が緊急入院の一ヶ月前でした。亡くなるまでの役一年間の作歌は、その時々私の心境を留めることが出来、掛替えのないものとなりました。歌に出合えた縁を有難く思います。夫の場合も、容態がどんどん悪化して用足しの為のほんの僅かな帰宅の間も気掛りでならなかったこの時の歌は、我ながら緊迫していて、作ったと云うより迸り出た感じがします。二度と味わうことのない心境です。

玉蜀黍のトンネルのビニール飛びしまま明日は霜かと夫はつぶやく 内藤 志 げ

春先は西の風か嵐の様に荒さぶ事がよくある。玉蜀黍の霜よけのビニールが飛ばされる今の私にはその手直しの手伝いが出来ない事がせつない夫のつぶやきでした。

「飛びしまま」は「飛ばされしまま」「夫はつぶやく」は「夫の眩き」どちらも歌を作っている自分をつくづく反省させられました。

毎月の原稿も間違の多く読み返しの足りない事を申し訳なく思っています。

子規をまね思ひつきの行動の失ふ時間の効果を知りぬ

夏目勝弘

子規の旅は、思い立った日に行動に移すことが多い。長塚節は地図等で入念に調べてから旅をする。

どちらにするかは、性格にもよるが、たまにはいつもと違った行動をと思ひ、子規の真似を試みた。

無用の用と言う言葉があり、思わぬ発見が、プラスになることがあった。

下調べをしてゆくとそのことしか目に入らないが、色々なことに気がつくものである。

営農は継ぐ人もなくふる里は老人ばかりの深刻な過疎

林伊佐子

私のふる里は、鳳来山寺山の西比にある過疎となつた部落です。時世の流れに都会や、町に転出して、棚田も畑も杉森となりました。営農を継ぐ人も高齢者となる深刻な過疎です。子供たちの姿が見えないことは寂しいです。週末は、主人と旧家の手入れと道路の補修に帰省します。自然に恵まれた悠々自適のふる里が好きです。

『俳句』

暴風に散りたる椎の実の青き
古利まで萩隋道をくぐりけり
水拔きの溜池小さし秋あかね

松本周二

竹とんぼ秋天高く放ちけり
栗飯に栗剥きし傷わすれけり
童心に戻りて廻す木の实独楽

山元正規

この庭が終の住処か秋の蝶
早暁の店先匂ふ新豆腐
日暮れては賑ふ神酒所秋祭

川井素山

父母亡き家木犀薫るばかりなり

重野善恵

台風の旅の楽しみ吹き飛びぬ

濯ぎ物慌て取り込む秋の暮

暮れなずむ金の穂先の芒かな

田中清秀

帰宅路の茜に染まる鱗雲

携帯に月を写して雨上り

武蔵野の杜に祝詞と法師蝉

森岡陽子

今宵また月隠れたる十三夜

御嶽の怒り呼びたる紅葉季

台風は今通っているすさぶ風

柳田皓一

風やみて台風の目と決めにけり

赤々と手を伸ばしたき林檎の木

爪を切るかそけき音や秋の夜

米田文彦

丹波路の土の匂ひの栗を剥く

千年杉の洞の深さや秋の蝶

足元に琵琶湖現る秋の山

和田勝信

源平や生田の森に蚊の名残

朝寒や自転車でゆくアーケード

青みかん一つちぎって告白す

植村公女

朗読の声音やはらか露日和

公園の雑木紅葉や雲流る

悪役は赤ら顔なり菊人形

小池清司

突堤に釣竿並ぶ冬隣

鶺鴒来て季の変わり目を告げにけり

徒然を秋の金魚と差し向ふ

小柳千美子

突き抜けの造酒屋や昼の虫

手折りたる黄菊片手に農夫かな

かさね吟行会

(海ほたる・木更津) 十月

田 中 清 秀

「東京湾アクアラインは東京湾の中央部を横断する延長約十五kmの有料道路で首都圏幹線道路網の一部を構成するものです。海ほたるはトンネルから橋に移る部分までの全長六五〇m全幅約一〇〇mの長方形をした島でパーキングエリアは五階建てで構成されており、一階から三階までが駐車場で四階・五階が営業施設となっています」(海ほたるのホームページより)。今回のかさね吟行会はこの東京湾アクアラインで海ほたるを経由して木更津まで足を伸ばすバスの旅である。

平成二十六年十月二十八日(火) 川崎駅に集合、十時二十五分発の木更津行き的高速バスに乗る。天候は素晴らしい秋晴れ少し風が有るものの絶好の吟行日和である。参加者は松本周二を始め川井素山、山元正規、森岡陽子そして今回初参加の渡邊孝子と筆者の六名であった。

海ほたるまでは一時間足らずで到着、最上階のデッキから羽田や横浜、木更津方面を望む三百六十度の清々しい遠景に皆感動の声をあげる。水平線には首都の高層ビル群やコンビニナートの工場群が並び、真つ青な空にはジェット機が昇る。漁船やタンカー船が行き来する中かもめが風に向って飛び風向計の吹流しが丸く大きく膨らみ秋の日差しで海がキラキラと輝く。そんな景色を眺めながらのカフェテラスでの一杯のコーヒーは心を和ませる。

秋の海同じ方向く群かもめ

正 規

航跡の一筋残る秋の海

素 山

船行きて重なる水脈や秋の海

陽 子

秋晴れに白波砕く吃水線

清 秀

一時間ほど休憩して夫々好みの昼食を摂ったあと、二本遅れのバスに乗りさらに旅を続ける。木更津では地元松本氏が出迎えてこれで全員が揃う、早速ボランティアのガイドの案内で市内の散策を開始する。そこ此処に

狸の置物がありメタボ狸や逆さ狸やら様々に目を楽します。狸塚のある證誠寺は「證誠寺の狸ばやし」の曲で有名である、また、大神輿のある八劔八幡神社、木更津甚句の芸者若福ゆかりの成就寺、切られ与三郎の墓の光明寺など訪れなければ分からない名所旧跡がいくつもある。

萩咲いて鎮まり返る證誠寺

周二

色変へぬ松這ふ寺や狸塚

清秀

萩の庭浮かれ狸の腹つつみ

孝子

一茶が見たと言われる東岸寺の藤棚、ここで開催された句会で「藤棚やうしろ明りの草の花」の句を一茶が詠んだと言う。俳句は即事であり実景であり純現実の中で発見や感動があり嘸目と睦目の作であると言われる。多くの俳人は眼前の情景や身近な場面を上手に表現している。一茶は何を見て何に感動したのか、それを考えるのも一興である。

吟行のそぞろ歩きや柿の秋

周二

そこに拾ふものあり秋深し 由利
冬近し肩を寄せ合ふ無縁墓 陽子

句会の会場は木更津の市民会館で今回は参加者が少ないが其々に思い思いの作句を披露する。

同人より句作の心得「ここ、いま、われ」の解説があり改めて俳句作りの原点を学ぶ。そして次の句会を楽しみにしながら散会、来た時と同じく東京湾アクアラインをバスで戻る。

■かさね吟行会■

日時 2014年12月23日

場所 小石川後楽園

集合 小石川後楽園入口 予定

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』(三十二)

丸山酔宵子

『ハモン・イベリコとタパスたち』

マドリッドの10月は未だ日差しが強く、夜も7時過ぎでも明るい。街の至る所にあるバルやレストランは、オープンテラスになっていて、テーブル一杯にタパス(小皿料理)を並べ、ワイン片手に美味しそうに楽しんでいる。

オリーブとバケットは勿論、カナッペいろいろ、アイオリ(ニンニクと油のドレッシング)、イカ・リングフライ(ぶつ切レモン添え)、アンチョビの酢付け、ムール貝の煮込みなどを、バケットに付けたり、手でむしゃむしゃと……。良く食べ良く飲み、まあ、良く喋ること喋ること……。

矢張りタパスに欠かせないのは、何と言ってもハモン・イベリコ(イベリコ黒豚の生ハム)。バルのオープンキッチンのカウンターから店内天井一杯に、何十本い

や100本以上の1本10キロぐらいの熟成されたハモン・イベリコ骨付き原木が天井から整然と吊るされていて、それは壯観である。

飴色の濃い赤色ときめ細かな脂肪(サシ)が特徴で、白豚から作られるハモン・セラノとは区別される。生産数はハモン・セラノより非常に少なく、その飼育にも手間と時間がかけられ、出荷されるまでの熟成期間も長い。

イベリコ豚は主にイベリア半島西部に広がるデエサと呼ばれるオークやコルクの林で放牧され、どんぐりの実などを食べて育つのである。その生肉を塩漬にした後、余分な塩分を洗い流し、気温の低い乾いた場所に約2年から5年程吊るして乾燥・熟成させる。

ハモン・イベリコ最大の特徴は、品よく照りのあるきめ細かな霜降り脂で、これが舌にとろける味と口いっぱいひろがる香りを作り出すのだ。口に入れたとたんに溶け出すハモン・イベリコの脂の融点は何と約37度。こ

の融点の低さは22ヶ月以上に及ぶ長期熟成にしかできないオレイン酸やビタミンB群も豊富な、実はヘルシーな脂なのだ。

ハモン・イベリコはタパスに欠かせないが、忘れてならないのは、ムール貝料理である。MEJILLONES AL AJILLO (ムール貝のニンニクオイルのトマト風味)は、この店の人気料理なのか、あちこちのテーブルでも注文していて、美味しそうにムール貝を食べている。

スープをたつぷりと含んだムール貝をむしゃむしゃ食べつくし、残ったスープにバケットを浸して豪快に食べていると、何処からかカメラを伴ったテレビクルーが近付いて来る。セクシーなテレビキャスターが突然マイクを差し出し、スペイン語で話しかけてきたのである。スペイン語は判らないと答えると、英語で、『どこからいらしたのですか・・・』『ムール貝は美味しいですか・・・』聞けばマドリッドのチャンネル5の午後のワイドショーとのこと。

「オー、グラーチエ・グラーチエ、ムーチョ、ムーチョ。ブラボー、エスパニーヤ、ハボン・・・ブラボー・・・」と知ってるスペイン語風言語を乱発して、ワイングラス片手に、身振り手振りの派手なボデイラングウエッジで、答えたのであります。

ハモン・イベリコやムール貝には、スペインの美味しいマオウビール、クルスカンポ、サンミゲルもいいのですが、今宵はマドリッドの北スペイン北部カステージャの幻の銘酒リベラ・デル・デウエロ (RIBERA DEL DUERO) でいきましょう。芳醇な香りとしつかりしたボデイが熱いフラメンコのマドリッドにぴったります。

ムール貝汁吸いワインで秋の宵

酔宵子

ある自然科学者の手記 (31) 大橋望彦

『戊辰に生きる祖母みつの記録』①

『光子』

昔の歌に、『旅順郊外約なりて、敵の將軍ステエセル、乃木大将との会見は、所は何処、出師營……昨日の敵は、今日の大友……』と言うのがあります。昨日まで激戦を繰り返し、屍を重ねた仲であったのが、いざ終戦と成れば、互いの勇氣、戦略を語り合い、固い絆を作ったと言う話には、子供心にも感動したものです。それが、同じ我が国の「戊辰の役」に於いては、今日此の時代に於いても、其の怨念が後を引いている様であります。是は一体何故なのかは、此処で申しません。只、当時の官軍「長州軍」と賊軍「会津軍」とは、今でも其の尾を引いているのは事実の様であります。そこで、此のお話は、一切その様な関係を先ず、無視して頂いて、お読み戴ければ幸甚であります。

これは、私の実祖母の体験談で御座います。この祖母はそれは厳しい方でした。然し、心の優しく、賢明の方でも御座いました。私は婆さんと云われる位にこの祖母が好きでした。学校を終えると、ランドセル(カバン)を放り出して祖母の部屋に行き、一緒にラジオを聴いたり、トランプをししたり、お三時の菓子やねだりました。その祖母は百歳の高齢で他界したので御座います。それは大往生で御座いました。12月31日の大晦日の日に、一家で年越し蕎麦を食べ、炬燵にあたりながら紅白歌合戦のテレビを観ていたときで御座います。晩酌で気持ち良くなったからと先に引き込み、それまで静かに隣の部屋で寝ていた祖母の、大きな軒が急に唐紙越しに聞えてきたので、不思議

に感じ診に行きました。その頃は、既に祖母の意識は無くなつておりました。急いで医者を呼び、間もなく往診された医者が脈を取りながら首を傾げ咳いておられます。心臓が大変丈夫な方ですね……と。年も替わり、夜中の2時過ぎになって、医者が「ご臨終です」と宣告されました。

祖母は、万延元年、福島県の会津藩士、当時の軍事奉行の一人、鈴木丹下守重光の長女として生まれ、大変恵まれた環境で育つておりました。それが「戊辰の役」を境にして、数奇な人生を送ることとなりました。

ここに一冊の『光子』と言う冊子が御座います。これは、祖母光子(時々、昔風にみつとも書くことが御座いますか)自身で綴ったメモに口添えをしながら伯父の鈴木威が転写したものです。ほぼ原文のままですが、多少現代用語に訳した部分も御座います。また、他に参考となる史実があれば適宜挿入致しました。

『会津城下の戦い』

慶応四年戊辰の年、私は八歳でありました(後に判ったことから実際には九歳と申しますのは、是までズーッと長い間、祖母は文久元年生まれの酉年であると言いつつ参りました。処が、九十歳に成ろうと言う在る時、祖母が私に耳打ちを致します。「望彦さん、正直の事を言いますと、私は、万延元年生まれの申年なのですよ。」と、何で今迄それを違えて居たのですかと尋ねますと、或る若かった頃、易者に観て貰った処、大変悪い相が出て居りますので、申年を酉年に替えなさい、と言われました。更に、この事は人には決して言わない様にと念を押されたそうです。以来、文久生まれと云つて居たのですよ。と言うことでした。高齢に成ると、少しでも今度は年嵩に言いたいね、と、皆が笑いましたが、私は何か笑えま

せんでした。もつと前に此の此のことを言つてしまえば運が付いてたかも知れないのに・・・と思つていました。父は軍事奉行を務め、薩長軍の兵士がどんな攻め寄せると言ふ噂に世間が騒々しくなり、お城に詰つkindりの状態で、家へ帰ることも稀のようになりました。八月二十一日の夜、お城から火急のお召しがあり、父は取るものも取り敢えずに登城致しましたが、これが一生の別れとなるうとは、神ならぬ身の知る由も無かつたので御座います。

翌日、城中からのお使が参り、愈々明日は戦が始まるので、その合図は早鐘で知らせるから入城せよと言ふことでした。兼々、父からこのような事態になつた時は、その覚悟と、用意を細々と聞かされておりました。早鐘は三度鳴り、一番鐘を合図に身仕度を為し、二伴鐘で直ぐに出達し、三番鐘の打つ前には城中に入城せよと言ふことでした。万が一の場合には、武士の娘として、狼狽して生き恥をかかぬように、自害の仕方までも細かく教えられました。また、家財はなるべくそのままにして、一人毎に小判百両宛を用意してあるので銘々、其れを携帯するようにと細部に亘る気配り様でありました。愈々二十三日の明け方五つ時頃、早鐘が鳴り始めました。「それ戦が始まるぞー」と、皆々仕度に取り掛かりますと、市中は其が大変な騒ぎでありまして、男も女も荷物を背負つてあちらこちらに逃げ惑ひ、子供は泣き叫び、それは大混乱となつておりました。私は屋敷は、元、本二ノ丁にありましたが、御殿様（松平容保藩主）が京都の守護職となられ、家中の侍を多数お抱えになられたため、住が不足致しましたので、父の京都在任中（御殿様の警護役）は在宅屋敷を他へ譲り、一家は親戚へ同居致しました。御殿様がご帰国と同時に、また同じ本二ノ丁の北原家の隠居所を借り受け、一時仮住まい

を致しておりました。

当時の家族は、七十に近い祖母と、二十六歳の母と、八歳の私に、三十六歳になる伯母、その他若い下働きのお女（今時のお手伝いさん）三名が居りました。この七名が早鐘の鳴ると同時に身仕度を教わつた様にし、直ぐに城中を目指して家を出しましたが、生憎三日前から降り続く雨、しかもその時篠つく様な豪雨となつておりました。私はまるで遊山に行くつもりか、一番大事にしていた『ポックリ』を履いて出て、皆に笑われましたが、やつと八歳に成つたばかりの小娘でしたから無理もなかつたと、想い出す度に涙の種で御座います。

お隣の同姓である鈴木式部氏のお嬢様は、お屋敷を出た途端に流れ弾に当たり、敢えなくも命を落されました。家族一同が足袋裸足で門外に飛び出した矢先に、この惨めな有り様を目の当たりに致しまして、まず仰天致した様で御座います。その上、敵はもうお城近くまで追つてきたものと見え、物凄く小銃の撃ち合う音や、寄せ手の叫び声が手に取るように聞え、生きた心地も致しません。何処からとも無く、味方の武士の声がかして、『敵はもう御門近くまで攻め寄せて来ているので、此処から通行出来ません。ご門は既に閉めました。西へにげなさい。』と言ふ指示を叫んでおりました。入城を志して参りましたのに、それも適わず、誠に残念で御座りましたが、まして、目の前でお隣りのお嬢様の御最後を見せられたのは、老人、子供連れの私共は如何にする術も御座いませぬ。早速、致し方無く逃げ惑う町人の人に混じつて当て所ない。西へ西へ方向に走るの御座いました。

荷車で家財を運ぶ人、荷物を背負い、老人子供の手を引いて逃げる人、其れはまるで火事場同様の騒ぎで、その人達の間を押し分けながら逃げて参りますと、城下から凡そ二十町程して、大川という河岸に着いたので御座います。

絹の話 (49)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹と国民健康保険

【衣料と健康】

日本では、古代から現在まで衣料素材は大きな変化を遂げています。古代から中世まで人々の着用衣類は一口に麻といわれますが、格地域で実に多種多様な草木から繊維を取り出し、筆舌し難い労力をかけて糸作りをして来ました。夏の暑さには快適であったかも知れませんが、冬の寒さには命を縮める思いをしていた事でしょう。

戦国時代になって木綿の栽培が急速に普及し始めると、人々の着衣も棉中心になって、軟らかく、薄くすれば涼しく、厚く、棉入れなどにすれば温かく、洗濯も容易で染色性にも優れ、日常生活が物心両面で飛躍的に豊かになりました。特に棉の布団の普及が健康に寄与した事はいまでもありません。

絹は古代から特殊階級の着るもので、庶民は屑繭やケバを細いだものを着る程度でした。絹を重ね着すると寒暖の差を緩やかにカバーして、抗菌性ゆえに皮膚病にもかかりにくく、風呂に入る習慣のない時代でも汗臭く

なったりしないので思いの外快適であったと思われます。

化学繊維が普及した今日では、天然繊維100%の物を見つける事が難しいほど化繊が衣料品市場を席巻しています。それと平行してアトピー性皮膚炎はじめ低体温症、婦人病などの疾患が増えて来た様に思えます。絹を加工している人に花粉症などという人は聞いた事がありません。昨今衣食住うち、食については世論も厳しく安全をチェックしていますが、衣料については殆ど詮索されていません。製造物責任保険の下、生産者側の良識に任されている様な状態です。例えば問題があると思える物があっても、食品の様に症状が早く出るわけではなく、それが何から起こっているのか特定が難しいので、繊維では殆ど問題が起きていませんが、食や住では偽装が後を絶たないのであれば、衣料の世界だけ完璧とは思えません。例えば一本一本の糸に問題がなくとも、多種類の糸を合糸したり、織ったりした時、人の肌にとどの様な影響があるか、つぶさに検証した例はありません。

【絹の機能性を高く評価する】

ラジオ体操は健康を維持する為に郵便局の簡保が考えものだそうです。そうでなくても、古くから民間に朝起きたら乾布摩擦をしたり、子供は風邪の子、外遊べ、等

健康維持の知恵が沢山ありました。

今日のようにブローラー化した生活で、病になったら医者に行くのでは国民健康保険の赤字が増してしまうのは必定です。少しでも病気にならない心身を維持する事を国を挙げて考える必要があります。

衣服は心と身体の健康にとって大切である事が忘れられています。かつて棉の普及が革命的に人々の生活を幸せにした様に、絹を日常の下着などに導入すれば非常に有効な予防医療に役立つと思われます。

絹は血行を促進し、色々な病気の温床になる低体温を抑制してくれます。汗をかいても棉の3倍の早さで乾くので、気化熱を奪われ寒気がして風邪を引く事が少なくなり、災害時、避難所で低体温死亡も減るでしょう。冬のジバークでも命拾いをする事もあるでしょう。絹に触れた空気を吸う事で免疫性が高まり、幸せホルモンの分泌が促進され、穏やかな気持ちになります。

絹は抗菌性に優れていますので、汗臭、体臭を和らげ快適です。傷害時には消毒薬の代わりをして、化膿止めにも有効です。特にヤママユガ科の野蚕絹は多孔質繊維で緩衝性に富み、打撲などの保身にも役立つ、床ずれ防止に効果的です。絹には適度な保湿性が有りますので、乾燥肌の人には快適です。

この様な有為な機能性を持った絹を日常の下着に利用すれば、肉体的にも精神的にも病む事を予防でき、国民健康保険の赤字削減に役立つのではないのでしょうか。

【絹の下着普及促進】

ある大学のヒヤリング調査によると今世紀はじめは「利便性中心生活」希望者が60%以上であったのが10年後には「自然と共存優先」希望に逆転しました。それは、地球環境問題意識の影響かと思われます。

絹を作る環境は水も空気も昆虫ばかりでなく、哺乳類も魚類も豊かに育んでくれます。現在の利便性中心生活を支える医療制度はニーズを失いかけていないでしょうか。

絹を国民健康維持素材と認定し、絹の下着を国民健康保険で購入出来る様にすれば早急に普及が促進されると思われまます。百貨店が絹の機能性説明をいやがり、販売を渋るようならその説明に向いている薬局で販売する道を開いたらどうでしょうか。

絹の下着は、最近よく売れる商品ですが、商品バリエーションが少なく、機能性説明も不完全ですので、早急に対処が必要です。価格を安くする為に、棉などの混紡も有りますが、絹製品が絹の機能性を発揮する目安(混紡率)の規定を作る必要もあります。

物理学者と詩歌の世界 (59)

一石

レオナルド・サスキンド

レオナルド・サスキンド (Leonard Susskind、1940—) は米国の理論物理学者。素粒子物理学における弦理論の創始者の一人。

1940年に、ニューヨークのユダヤ人家庭に生まれる。高校卒業後、父親の仕事を手伝ってしばらく配管工をやっていた。1962年に、ニューヨーク州立大学の物理学科を卒業、1965年コーネル大学で博士号をとる。イエシーバー大学の助教授(1966-1970)をつとめる。その後、イスラエルのテルアビブ大学(1971-1972)、イエシーバー大学の教授(1973-1978)、スタンフォード大学の教授(1979-2000)。現在、米国科学アカデミー会員、カナダ・ペリメーター研究所客員教授など(参考資料1)。

弦理論、場の量子論、量子宇宙論などにおいて多数の優れた業績がある。次のものは、いずれも現代物理学に大きなインパクトを与えた。素粒子物理学のJ・J・サクライ賞を受賞(1998)。
・南部陽一郎、H・ニールセンとは独立に、ハドロンに関する弦理論を提唱(1970)

・クォークの閉じ込め・非閉じ込め

・超弦理論におけるブラックホールのエントロピー

・ホログラフィック原理

・宇宙のランドスケープ論

サスキンドが著した一般向け解説書(参考資料2、3)からこれらの業績と彼の思想・思索を知ることができ。それらは知的興奮に満ちた最前線の現代物理学と宇宙論への招待となっている。

○『宇宙のランドスケープ』

この書では「宇宙はなぜこのようになっていたのか」「宇宙に生命が存在できるのはなぜか」という誰の心の中にもある根源的な疑問を追求している。サスキンドは超弦理論、インフレーション宇宙論、最新の宇宙観測結果に基づいて、この謎を探究する。そこで中心的な役割を果たすのは、サスキンドが2003年に提唱した「ランドスケープ(風景)」と呼ぶ概念である。これは超弦理論の研究から生まれたもので、可能な物理法則の全体を指す。それは「我々の宇宙」の物理法則だけでなく、いっさいの可能な物理法則からなる巨大な空間である。サスキンドは物理法則の可能性全体の空間を「風景」に見立てることで、そこに山や、谷や、平原などを見出す。その「風景」の中で、宇宙はボール玉のように転がってゆく。「我々の宇宙」の歴史とは、言ってみればそのボールが「インフレーションの棚」を転がってゆき、きわめて小さな宇宙定数を持つ谷で静止することだった。しか

も、この「我々の宇宙」は、もっとはるかに広大な「メガバース」(Megaverse - 小宇宙の巨大な集まり)の中のほんのちっぽけな片隅を占めるにすぎない。メガバースの中では、無数の種類の小宇宙が無限回出現し、それぞれの宇宙には我々が知っている物理法則とは全く違った世界が広がっている可能性がある(注1)。実に壮大な宇宙像が展開されるのである。

○「ブラックホール戦争」

ブラックホールとは、重力が強いために光さえ脱出できない天体である。そこに入ったら物質も2度と外に出られなくなる。ところが「この何でも呑み込むブラックホールはやがて蒸発して消えてなくなる」という驚くべき理論を提示したのは、あのS・ホーキングである。そのホーキングがまた物理学の土台に爆弾を投下した。それは「空間と時間の新しいパラダイム」にいたる「戦争」の始まりだった。ブラックホールに落ち込んだ「情報(エントロピー)」も消えてなくなる、と主張したのである。そんなバカなことがあるか!とホーキングの解法に対してサスキンドやトホーフトラが「宣戦布告」を行なうが、その論争は20年に渡って続いた。ただしこの「戦争」は理論物理学におけるアイデアの戦争、すなわち基本原理をめぐる戦争であって、純粹に科学上のもの、個人レベルでは友人関係のままであった。問題を解決し論争を最終させることになったのは、トホーフトによって最初に提案され、サスキンドによって正確な超弦理論の解釈が

与えられたホログラフィック原理である。ホーキングは2007年に公式に敗北を認めた。

サスキンドの言葉。

1) 日経サイエンス特集号で語った言葉(参考資料4)。「人間には思い描くことのできるものがあり、できないものもある。実在の本質はそうした理解を超えたところにある」。

2) 「ランドスケープ論」は反証しようがなくエセ科学のレッテルを貼られても仕方がないという批判に対して、「どこかの哲学者の反証可能性に関する意見と衝突するからという理由だけで、ある可能性を否定するのは愚の骨頂だ」と反論。

注1: 超弦理論の計算によれば、10の500乗個の「小宇宙」が存在する可能性がある。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia: Leonard Suskind
- 2) 『宇宙のランドスケープ 宇宙の謎にひも理論が答えを出す』(日経BP社)
- 3) 『ブラックホール戦争 S・ホーキングとの20年越しの闘い』(日経BP社)
- 4) 日経サイエンス2012年12月号、「反逆児サスキンドに聞く 物理で実在は語れるか?」

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十九 大村吾呉楼

大村呉楼は大正十一年にアララギに入会、中村憲吉・土屋文明に師事した。昭和二十一年に、のちにアララギ系の有力な地方誌となる「高槻」（二十七年に「関西アララギ」と改題）を創刊した。

茂吉なき日本の歌壇の虚しきをひとり思ふに山吹は散る 昭和二十八年『午前午後』

茂吉の死すでに伝はりしこの夕べ石に躓きても涙のおつる 歌詠みの末につらなる吾に来て茂吉の死を人の惜しみいふ

昭和二十八年二月二十五日、茂吉の訃報に接したときの悲しみを詠んでいる。

一首目の結句は巨匠を失った歌壇のそこはかとなし不安を暗示している。歌壇はこの年九月には釈道空を、翌々年には太田水穂を失う。

二首目は、新聞社勤務の作者にいちはやく茂吉の死が

伝えられたことを思わせる。三首目は作者がアララギの歌人であることを知っている人たちが半ば悔やみの混じることを言うというのである。

親しみ深きもの言ひの或るときにきびしき気性をつつみまじき 同

歌に親しむ誰のこころにも浸透し生きる茂吉をいまこそおもへ

一首目は、自分が知る茂吉は親しみ深いもの言いをする一方、ときには「きびしき気性」を内に秘めていたというのである。その茂吉の気性を詠んだ人は幾人もいる。二首目は、歌を詠んだり鑑賞したりする人々の心の中に茂吉は生き続けるにちがいないと強くおもおうという意味である。

午前二時には眼が醒むるぞといひまじき茂吉の死に近づくわれか 昭和三十四年『猪名野』

むかし茂吉が一あしごとに汗垂りし中辺路をこゆバスの埃のなか 茂吉文明の相たづさはり来し道か三十五年は過ぎおたるなり

三首目に「三十五年は過ぎおたるなり」とあるところ

から、この一連が大正十四年の茂吉を詠んだものであることがわかる。すなわち、比叡山で行われたアララギ安居会後の行動である。

二首目は、そのときの茂吉の歌「紀伊のくに大雲取の峰ごえに一足ごとにわが汗はおつ」（『ともしび』）を踏まえたうえで、いま自分は埃の中を歩いていると詠む。茂吉はその後、昭和九年にも土屋文明とともに熊野路に來て、「いにしへのすめらみかども中辺路を越えたまひたりのこる真清水」「熊野路の中辺路ごえはむら山をいくつ越えてし今ぞ磯波」（『白桃』）と詠んでいる。

一首目。昭和三十四年の大村呉楼が六十四歳であるところから数えると、茂吉六十四歳は昭和二十年である。茂吉は歌集『小園』のころ（昭和十八〜二十年）から老いの意識を詠むことが少なくなかったため、このあたりを踏まえているのであろう。

二十 扇畑忠雄

癒えたまひ生命しづけき君ゆゑに暗きに見ゆる沼も
身に沁む 昭和二十一年『北西風』

立ち上りよるめきてシヤツ着給ふを思ひゆらぎてわ
が目守るのみ

住む国を隣りて常にたのみにき今日は正目に最上川

と君と

「卸して熱い湯をかけ給へ」立ちて手づからカリン
の実を賜ふ

香しきカリンの木の実灯に置いてゆたけき君と相居
るごとし

茂吉翁の地下足袋はけるさながらに人立てる見ゆ太
鼓店の前 『とよたま』昭和三十八年

山形県金瓶での疎開につづき大石田町に移転していた茂吉を訪ねたときの歌が『北西風』の五首である。作者は宮城県仙台市に住むアララギの会員であった。

一首目「癒えたまひ」はこの年三月に患った肋膜炎が治癒したことをいう。三、四首目にカリンの実が詠まれているところから察するに九月下旬すぎのことかと思われる。

二首目には茂吉の予後のようすが詠まれている。三首目「常にたのみき」はいつでも指導を仰ぐことができることと心強く思ってきたというのであろう。五首目は、茂吉に貰った、黄熟して「香しきカリンの木の实」を夜の食卓に置くと茂吉と共にいるような気持ちになるというのである。

六首目は、大石田を散策する時の茂吉の姿を彷彿させる人を見たとき詠む。没後十年を経てなお作者の脳裡には茂吉が生きているのである。

楽しい時間 25

山本紀久雄

2014年10月31日

どこで聞いたか忘れたが、古代ローマ時代から「人生の親戚は悲しみ」という言葉がある。その通りで人生には必ず躓き・蹉跌がある。自分にとっては、それは家内の死であり、今は家内に深く慚愧懺悔しているところ。慚とは、心を以って悔いること。愧とは、身を以って改めること。懺悔とは、心から悔いたものを、口に出して身をして改めること。

家内はすい臓がんだった。手術を受けて開腹した時は、既に他臓器に転移しており、まだ若いのに本当に残念だった。悔しい。勿論、癌は早期発見に尽きるということは家内も熟知していたので、一年一回の健康診断を欠かさず、その他さまざまな健康に関する項目も取り入れ、体調管理に万全を尽くしていたが、すい臓がんは健康診断項目から外れているので、結果として見逃してしまった。

「五・六年前に強く勤めてすい臓検査をしておけば、早期発見ができ、命の問題にはならなかったはず。自分の見通しが甘かったせいで家内を亡くしてしまった」のだ。

家内は地域で様々な活動をしていたので、お通夜と葬儀・告別式には寺の住職が驚くほど、ご焼香の煙が絶えなかったが、いくらご会葬いただいても最愛の家内はかえって来ない。そのことが日夜、心を傷つけているが、この悲しみ・痛みは他人にはわからないだろう。

先日、家内が参加していた地域の生涯学級、その同級生

男性から電話があった。用件は仲間数人と仏壇にお線香をあげたいと言う、ここまではよかったのだが、その後、奥さんの想い出を私と語り合いたいと言った。これには「人の気持ちがわからない人達だ」と無性に腹がたち、日程調整がつかないことを理由に來宅を断った。

まだ家内が逝って二カ月、こちらの傷が深いのに、家内の想い出を、あまり親しくもない家内の友人達と語り合うのは、自分の心にもっとも残酷な仕打ちになる。多分、泣くだけで終わるだろう。その気持ちを普通の人、奥さんが健在な男どもには分らない。大体の男は、奥さんより先にあの世に行くと思ってる。

これから長く続く熟年生活を楽しむ最愛のパートナーがいなくなると、気持ちが落ち込んでいる。普通の状態に戻るには数年を要するだろう、という気持ちがわからないのだ。

しかし、ふと、もしかしたらこの事例は「その人の性格」が影響しているのではないかと考えた。人は「その人が持つ性格」で行動する。だから、悪気はなく、こちらを癒すやさしい気持ちで「寂しいだろうから話し相手になってあげよう」と善意の気持ちから発したのかもしれない。そういう性格・行動が相手の気持ちを傷つけることになるとは知らずに。

このように考えてみると、急に気持ちが変わった。なるほど、性格がその発言をもたらしたとすると、その「性格」とはいつたい体のどこから発するのだろうか。ここに興味をもったわけ。彼の発言を失礼だと怒ってみたが、これもひとつの出来事だ。これを事例にして「性格」について考えてみようと思うと、考えることは「創造」だから、気分は一新して前向きな「楽しい」検討の時間になってきた。もともと心理追求は好きなことだ

から、面白い。楽しい。

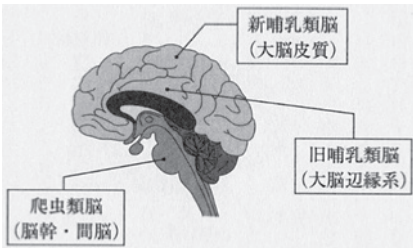
そこで改めて、人間について考えてみた。人は脳の指令で動く動物だが、実際はすべてを意識して行動していない。かえって本能というべき「無意識」で行動することの方が多い。

例えば、一日24時間という限られた時間の中で、睡眠、食事、仕事、買物、移動、テレビ、読書等、多くのことを処理しているが、これをいちいち認知し確認しながら行動していたらとてもこれだけの多くを処理できない。無意識という脳によって即座に意思決定する仕組みが、人間の中に備わっているからできるはず。

先日、細い路地で車の運転をしていたとき、道路にボールを追いかけて子供が飛び出してきた。咄嗟にブレーキを踏み、子供を避けたが、このとき、ブレーキを踏むのと「あっ、危ない」と気づくのと、どちらが先だっただろうか。ブレーキを踏む方が先だった。脳は視覚から入ってきた子供の姿情報に、危ない、避けようとして脳がまず先に足に指令を出し、ブレーキを踏ませて、その後に「危ない」という認知意識が起きたのである。

このように無意識行動によって我々の生活は営まれている。また、その無意識行動は脳の構造が影響している。では、無意識行動は脳のどこから発するのか。これによって、その人の24時間が違っていくことになる。

下図は脳の三層構造図である。「爬



虫類脳」とは、反射脳ともいわれ、呼吸、心拍等の生物として生きていく基本的な機能を自動調節し、反射的な運動の命令をさまざまな筋肉に送っている。

「旧哺乳類脳」は、情動脳ともいわれ、本能、情動を司る。食欲、性欲、快、不快、怒り、不安等の情動、学習・記憶に関係しているように、性格はここで決まる。

「新哺乳類脳」は、理性脳ともいわれ、四つの領域に分かれ、行動、意識、認識、記憶等を司り、様々な情報を基に高度で複雑な処理や判断を行っていて、もともと人間らしさを担う脳部位である。

だが、脳科学者は「私たちの認知活動の95%は無意識に行われており、意識しているのはわずか5%である」というように「新哺乳類脳」の機能する分野はわずかな対応にすぎない。そこで、その人がとる行動を探ろうとしたら「旧哺乳類脳・情動脳」を検討しなければならぬことになる。しかし、脳の中身は外部から分らないのであるから、結果として、その人の行動を見て、あの人はあのような性格・情動脳なのかと判断することになる。

これは現代のマーケティングの問題点も教えてくれるはず。ある新商品を発売しようとして、事前にアンケートをとって発売OKとなったが、実際には売れなかったということが度々ある。これはアンケートが理性評価としての5%しか反映していない、無意識な状態で起きることがアンケート意識に反映しないことを意味する。実際に発売された商品を目の当たりにした消費者は、その人が持つ無意識分野で購買の意思決定をするから、事前予想とは異なる。気分が辛い中、敢えて、時にこのような「楽しい」時間を作り出している。

永平寺 (1) 夏目勝弘

お寺の総代になったことにより、永平寺に行くことになった。子供のころより近隣の葬儀には、私がほとんど出ていた、参列のみではなく手伝いもしていた。

そんな関係で、年配者たちよりこの地方の葬儀に関することはよく知るようになつてしまいい今に至つては。

一度は永平寺の内部に入つてみたいと思ひ参加した。

斎藤茂吉の歌集「ともしび」に永平寺吟として三十四首の短歌が載つている。茂吉の歌の見方、捉え方等を知る機会にもなればと思ひもあつた。

バスによる団体旅行のため、今までみたいに一人旅のような自由時間がとれない。

道元のことも知りたい、修行の地で感じてみたい。

釈迦も道元も物質的にも恵まれた生活なのに仏門に救いを求めていった。

道元が八歳の時母伊子の死により比叡山に入るが教えに疑問を持ち、健仁寺に移る。

のちに中国に渡り天童山景德寺に入る予定が健仁寺での臨濟禪の修行が中心であつたため入山がなかなか認められず港で船に留まる。

二十四で中国へ二十八歳で帰国・健仁寺に帰る。京都で禅道場を開き越前の志比庄に「道場」として大仏寺を開く、のちの永平寺である。病の為永平寺を去り京にて療養するも五十四歳にて歿す。再び永平寺への願ひは適わず。

道元を禅を中心に一ヶ月ほど勉強をしてみた。現実の永平寺に行き感じたことは、道元の厳しい戒律も今の修行僧には無理のように感じた。

禅の修行に関係あるかどうかは、わからないが入山一年二年の修行僧の七割ぐらいが黒ぶちの眼鏡をかけている。眼鏡の産地とはいえ少々不思議に思えた。

ようやく永平寺での参拝もすみ、四十分余りの自由時間が出来たため、茂吉の歌に歌にある玲瓏巖を見にゆく、寺を出て谷川沿ひに五分ほど上ると、高さ二十メートル余りの巖がコノ字になつていて、山よりの水が樹木に暗むなかを静かな音を響かせ白磁色におちていた。

玲瓏巖一連十首のなかより

○この巖より滲みいづる水かすかにて苔の雪となりがてなく五日。
アララギの安居会は昭和二年八月二日より八月六日までの五日。

今見ている玲瓏巖は水量ゆたかに滝となしている。この状態を茂吉が見たならどのような歌を詠むのだろうかと思ひつつしばし居た。

アララギ第四回安居会一連五首

○大き聖いまし山ゆながれる水ゆたかにて心たぬしも

○もるともここに明暮る大衆の淋汗の日にわれもこもれり

今日は十一月四日、永平寺、巨木の木々の空間に細く丈の低いカエデが今見ごろとばかりに木洩れ日のなかで静かに枝々を伸ばしている。

あわただしい時間の流れを谷川の瀬音が心を落ち着かせてくれる。

「氷魚」のことから (167) 岡本八千代

御嶽山の火山爆發以来はや一ヶ月……。人間のその人その人の運命は全くわからない。今日ある日感謝するほかない。

わたくしは私として他人にあらずかみしめつつもけふの日暮す

などと歌のような歌でないような私のメモが出てきた……「かみしめつつも」の思いの中で、やはり、子規の少年時代を探りたい。

・子規たちは少年の頃から、貸本をよく読んだ。貸賃は、五冊で一昼夜五厘で、一日の中なら、何度とり代え、何冊になっても、五厘であった。多くは軍談もの、馬琴のものも大方読んだといわれている。

・子規は水滸伝や八犬伝の中に名文があると、よく、写し取っていた。

・また子規は、一休和尚の伝記を非常に面白がって、その幾冊かを写して合本にしたりした。

・こうさん(良のこと)が言うには、「のぼさん(子規)は字が達者で写本などは苦と思わず、楽しみにしていた」と。

・習字は学校にもあったが、別に山之内先生の許に二人して習いにも行った。

・松山では天神祭の時には、唐紙か白紙の全部に、大字を

書いて奉納もした。二人ともよく手習をして奉納した。

次に子規十六歳の頃のことを書いてみたい。この頃は、河東静溪先生(河東碧梧桐の父親)教わった。この人は、やり朱子学の道学者であって、松山藩の少参事の役まで勤められた人であった。彼らは、この先生によい感化を与えられ、薫陶していただいた。

・夕刻から出かけて、先生の八大家や近思録の講義を聴き、また四書中の何かを輪講して討論をやったりもした。

・また、静溪先生に詩の添削も願っていて詩の興味もあり、月夜の時など松山の郊外石手川の堤に上り、詩を吟じたり、天を仰いで、太極を論じたりした。

・そして、ついに、河東先生の愆愆(すすめ)によって、詩会を組織した。会の名は同親吟社と称した。

・その他に、書画会を組織し、詩会同様にやっていた。これらの会は、当番があつて、当番は、さし重という重箱

へ会員たちの食べるだけの豆いりを出し、茶の世話をするのが義務になつていた。先生の指図もあつたらしい。その時には、宿題と即題があつたが、みな当番が出題するのであつた。「会する者は大体五人だったが、その他にも二三人はあつたかもしれない」と三並氏はいう。

かくして、この会は、「どこか景色のいい山の中へ遊びに行こうではないか」と話しはもちあがつてゆく。(子規全集、回想の子規を参考にした)「少年老い易く学なり難し」を実践してゆくような子規たちの少年時代に今も私自身あこがれの気持ちを持ちつつ。――

ことのはスケッチ (432) 今泉由利

『バルセロナ』

「もう飛行機に乗れないかもしれない……何となく自身がなく……そんな時「バルセロナに、テンポラーの家」を借りたから、絶対に来なくてはだめ！」玉由と由野に励まされ、「行ってみようか」という気持ちになった。

三河アララギへの原稿が集ってくる。添削みたいなこともあり、割り付けをし、原稿用紙での原稿をパソコンに打ち込みしていたべく手配。表紙絵を描く。校正。発送。一ヶ月間に渡す一つ一つの日付けの、どの一つも欠かせない日常を遣り繰りし。枯れてしまった「幸福の木」の一枝だけ蘇った植木鉢の水やりのこと、すぐ満ちてしまう郵便受けのチェックを頼まなければいけないこと！

心臓が重くなつて、甲状腺の先生から「お守り」としていただいている「心臓の負担を和らげる薬」を飲んだりして……旅の人となる。「飛行機に乗れない」と思い込んだ年月に、目新しいことが増えていること、世の移ろいにびっくりしつつ、十三時間の飛行中、薬も飲まず、干からびることもなく、ロンドンに着いた。

アムステルダムで仕事をしていた玉由と、ロンドン空港の人混みで会い、ニューヨークから来た由野が待っていてくれるバルセロナに向けた乗り継ぎ便に乗った。夜中ほどにバルセロナの「2LDK」基本的必需品の整っている「家」に着き、ひとりづつの部屋を確保し、バルセロナの休日の始まり。次の朝、目覚めると、すぐ近くの「市場」へ。朝食にゆく。

肉類、ハム類、玉子類、魚介類、野菜類、果物類、花々類……すべての品々の濃い色。光り輝き、全部買ってしまいたい衝動にかられる。なんにも要らなかつた心の、この変りよう。市場の中のあちこちにカウター席の店があり、出来上った料理が並んでいる。毎朝ここに来ているような地元の人々の隣りに座り、コーヒーと茸のオムレツを頼んだ。季節の香り、おいしい。朝だというのに鯛の唐揚げも……料理も、隣の人も、言葉もアルゼンチンと同じ。リラクセス。

どの道にも広い自転車専用道路が付いている並木道を歩いて、サグラダ・ファミリアへ。一八五二年生まれのガウディが造りはじめ、神とバルセロナの人々の意志により今も造り続けられている空に突き刺す、カトリック教会。

数学ではなく綱状の糸に重しを付け、自然の力で最も安定する模型を作成して造りあげたのだと。ものすごいことになっている。

カサ・パトリヨなど、人々が住むために造られた。ガラデイの曲線の建物がいくつも見られる町並。ここに住んでみたい……との希望も生まれた。

カタルーニャ音楽堂。本当とは思われない、夢の中に居るのだろう。今も演奏会が開かれる。食事タイムも、しっかりしつかり味わって。小さなムール貝。平たい殻にしつかり付いてかるカキ。茸。鮫鱈。イカ墨。生ハム。毎日こんなの食べていたい。

夜は、大きなサッカー場、カンブ・ノウ。それはそれは大きい。そこをメッシが走る。ゴールする。ネイマールの敏速、ゴールする。全エネルギーでウェーブに加わる。叫ぶ。

「死んでしまうのかな！」だったこんな気持ちふつとんだ。もつともつと沢山の時を、子供達と一緒に過さないと勿体ない。

「歴代天皇御製歌」(三十一)

貫名海屋資料館

『円融天皇』第六十四代・在位九六九年(十一歳)―九八四年(二十六歳)

円融天皇、村上天皇の第五皇子。藤原氏の他氏排斥「安和の変」により、幼帝を擁し政治を私する藤原氏の専横がうかがわれる。

右大将道綱の母の「蜻蛉日記」が成る。

二十六歳で讓任し、仏門に入り、円融寺に住し、風流文雅の生活をおくられた。

歌集に「円融院御集」あり。

朝夕に馴れ見しことをおもひ出でよ吹上げの浜の風につけても

(新千載集)

九重にあらで八重咲くやまぶきのいはぬ色をばしる人もなし

(新古今集)

いはぬ色い・は・ぬ・色 || やまぶきは、くちなし色く・ち・な・し・色、言はぬ色言・は・ぬ・色と。

大方の春はきぬるにいかなればした待つ花のおそく咲くらむ

(玉葉集)

編集室だより【二〇一四年 十月】

○毎月々の「三河アララギ誌」より気になる短歌、随筆…など一編、『三河アララギ賞』を設けます。平松温子さん「和菓子街道」のその時々々の和菓子を賞として贈ります。

平成二十六年十一月号の三河アララギ賞。弓谷久子様『スーバームーンと子は言ひ我は重陽の名月と言ふ空仰ぎつつ』

○「海ほたる・木更津」吟行の下見に参加。海の中、ぼつんと建造物「海ほたる」。海を渡りゆく長い橋。木更津に着くと、八剣八幡神社の歴史、日本橋にお米を運んだ木更津船、木更津港、童謡・狸ばやしの證誠寺、赤い萩。白い萩。アララギの木に赤実。

○原子の動く音が録音された。極小音波をマイク口波に変換。マイク口波は、マイク口波増幅器を使い記録出来るほど大きい振幅を得る、と。

○角川「短歌年鑑」に依頼された原稿を書く。他結社とタイアップすることもなく黙々と三河アララギ流でゆく。

○十月二十日より二週間ほど、ロンドン、バルセロナ、ニューヨークへ行ってこようとしている。留守にしても差し障りの無いよう、よくよく考えながら。

○山岡鉄舟研究会による、武蔵野の真ん中にある郷、中野周辺探訪。

○奥多摩の石灰を、江戸城構築のために運んだ青梅街道、青梅鉄道のこと。徳川三代将軍「家光」八代「吉宗」：鷹狩

りをされたところ。

山岡鉄舟が、かつて居住していた鎮國山、高歩院禅寺（鉄舟会禅道場）において、本当の座禅の人にまじり素人私も参加させていただけで「禅を組む」という経験をした。この不思議な、無^ろの感覚が身に残っている。

○手持ちのケータイを、外国モードにして、どの国でも使用可能にする経験をした。本当に通用するのかなー。

○仕事でアムステルダにいた玉由と、ロンドンで会い、一緒にバルセロナに着くと、ニューヨークからの由野が、バルセロナの街中に「家」を借りて待っていてくれた。自分達の家^がになったところを基点に、気儘にすごす。

○アントニオ・ガウディのサグラダ・ファミリアへ。家から歩いてゆける。驚きと、どうしてこの姿になってきたのか：考える。数学は使わず、網状の糸に重しを付けた懸重形の模型などを作成し、この驚きの構造に至ったのだと。

○カサ・ミラ、やっぱり歩いてみると着いた。街の至る所に、同じような建物がある。今の世とは思えない。時代をまちがえてしまったのかな。

○カタルーニャ音楽堂。美しい音楽が表現されている。現役の音楽堂。美しすぎる。本当の夢にちがいない。

○サン・ジョセフツッペ市場。人間の歴史をかけて美味しくした食物群。美味しすぎる。沢山すぎる。

○カンブ・ノウ。十万人近くの入場者の、どこかいサッカ―場、バルセロナ・チームの、メッシ・ネイマール：声を限りに応援した。いい気持。

和菓子街道 (98)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(21)

かつては、20年に一度の伊勢神宮の遷宮の時には舟橋がかけられたものの、常には橋がなく、昼夜を分かたず舟で旅人を渡していたとい宮川。今では大きな橋がかかり、歩いて渡ることができる。その宮川を渡れば、伊勢神宮の外宮はもう目と鼻の先だ。

伊勢神宮は内宮、外宮をはじめとする125社の総称で、正式にはただ「神宮」とのみ称する。古来、神宮に詣でる際には、まず外宮、次いで内宮の順に参拝するのが習わしだ。私も慣例に従って外宮からお参りすることに。

その前に立ち寄っておきたいのが、外宮の別宮のひとつ月読見宮の近くにある大正12年創業の虎屋ういろだ。こちらのういろは、私にとっては懐かしい味。母が昔作ってくれた小麦粉製の黒糖ういろを思い



出させてくれる。昔は黒糖ういろだけだったという虎屋のういろも、今は種類が豊富。選ぶのに苦勞をして、外宮参拝が遅くなってしまった。

色とりどりで目にも楽しい虎屋のういろ

◆虎屋ういろ

住所：三重県伊勢市宮後2丁目2-8

電話：0596-23-500

お知らせ

▽一月号の原稿は、十二月一日(月)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集三河便り

△発送を終えて、次の日、会員胃甲節子様の訃報が届きました。

「八月三十一日に亡くなりました。」と御主人様から連絡をいただきました。

長い闘病生活でした。でもいつも前向きに短歌に取り組んでいらつしやいました。

野の草花を散歩のつれづれに目を留めて、短歌として楽しまれ、御家族を大切に深く愛されておられました。

すてきな歌を沢山残されました。

御冥福をお祈りいたします。(小野)

胃甲節子さんを心に、十二月の表紙を描きました。(今泉)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信用封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年十一月二十五日印刷 第六十一巻 第十二号
平成二十六年十二月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

平松 裕子・山口 千恵子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会 〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九
E-mail yuri188@cronos.oon.ne.jp

URL

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創美